

特 集

シーニック・アンダースタンディング

ー無意識にアプローチするための精神分析の概念ー

クラウド・コッヒャー¹監訳：大山泰宏²翻訳：天下谷恭一³、村井雅美⁴、木村大樹⁴、松岡貴子⁵

1. フランクフルト精神分析協会 精神分析家

2. 京都大学大学院教育学研究科 心理臨床学講座 准教授

3. 京都大学大学院人間・環境学研究科／総合人間学部 学生相談室

4. 京都大学大学院教育学研究科 臨床教育学専攻 博士後期課程

5. 社会福祉法人 聖家族の家

はじめに

本日の講義では、治療セッションの中で起こる患者とセラピストの具体的な出会いに注意を向ける、精神分析的理解の特別なアプローチに焦点を当てたいと思います。というのも、セッションの状況の中で明らかになる患者の無意識の葛藤がそこで垣間見えるためです。

私がお話しするのはシーニック・アンダースタンディング（scenic understanding）というものです。この概念は1960年代から1970年代にドイツで起こった精神分析理論の特別な発展の中で生まれたもので、主としてドイツの精神分析家であるヘルマン・アルゲランダー（Herman Argelander）とアルフレッド・ローレンツァー（Alfred Lorenzer）によって発展させられました。両者とも、フランクフルトに現在もあるジクムント・フロイト研究所とつながりを持っていました。ここでは、主にヘルマン・アルゲランダーの概念と、彼が自分の考えを紹介した『心理療法の初回面接』（Argelander, 1970）という書物に言及したいと思います。

現在私たちは、シーニック・アンダースタンディングが精神分析の仕事にとって非常に価値のあるものだと思っています。なぜならそれは、治療セッションで患者が私たちと出会う中で展開する内的世界を直接に観察するための道具を、私たちに与えるからです。この概念は、患者に起こっていることについての考えをセラピストがどのように得るか、ということを理解する助けとなる、とても重要なものです。ある意味では、患者はまるで劇中にいるかのように、シーンを演じています。そして分析家はこの劇の観客であるだけでなく、実際に能動的にそれに加わってものいます。

この発表では、まずアルゲランダーが自書の中で最初に提示した概念を描き出します。次に二つの臨床事例を紹介し、これらの事例から、分析家がシーニック・アンダースタンディングの概念を使ってどのように仕事をするのかを例証し、次に患者－治療者関係に関する他の概念と関連させつつ、この概念の理論的影響について考察します。

1. 『心理療法の初回面接』

アルゲランダーによるこの書物は 1970 年に発表されました。彼はジクムント・フロイト研究所で精神分析家として働き、研究所創設者のアレクサンダー・ミッチェルリッヒ (Alexander Mitscherlich) が引退した後に、その後を継ぎました。彼は自著において、分析家が患者から得られる情報を吟味する時、次の三つの情報ソース (出所) を区別しなければならないと述べています。すなわち、客観的情報なのか、主観的情報なのか、そして最後に大事なのが、彼がシーニックな情報と呼ぶものなのか、ということ です。

客観的情報は、検証可能で、論理的な証拠があるという事実によって特徴づけられます。客観的情報からもたらされた知見は、知的理解に基づいていて、たとえ状況そのものを見ていない第三者に対しても、確かなものとなりえます。

主観的情報が提供するデータは、もう少し信頼性は低くなります。そこで決定的に重要なのは、患者個人がその情報に与えている私的で個人的な意味となります。そこでまず重要なのは、患者個人がその情報に与えている私的で個人的な意味です。主観的情報の特徴は、状況そのものが証拠となるということです。すなわち、情報と、その状況で生じている事象と、患者がその状況に付与している意味とのあいだに、対応関係があるかどうかということです。

シーニックな情報は上記二つのソースとは異なります。それは、相手の反応を含めた、私たちがシーニックな証拠と呼ぶものに特徴づけられます。この理解に従えば、シーニックな情報は常にある関係の中で生じたことの結果ということになります。シーニックな証拠は、逆転移反応も理解の参照元として含まれているという意味で、相手との情緒的な応答を前提にしています。

アルゲランダーは、「十全な」精神分析的初回面接とは、これらの三つの情報ソースを統合して、その状況における無意識的な含意について、患者と治療者の間に生まれるゲシュタルトの顕現を導くような考えを形作らなければならないと主張します。このゲシュタルトという概念は、20 世紀初頭にドイツの心理学者マックス・ヴェルトハイマーによって概念化されたゲシュタルト心理学の用語と関係があります。中核となる考えは以下の通りです。つまり、私たちの知覚は、外界から来るさまざまな刺激が、「ゲシュタルト」というドイツ語でよばれるような、特定の形式の中で組織化されることによって形成されます。アルゲランダーは、患者と分析家の間に生起するものが、ゲシュタルト現象の形成法則に則ったものであることをはっきり示すために、このゲシュタルトという概念を用いています。それは患者と面接者の間にある相互依存的な関係の結果なのですが、シーンの中にいる面接者はもはや客観的な観察者ではなく、自らの人格をもって相互に関係し、全体としてのシーンを創り出すのです。シーンは患者と分析家の間に立ち現われてくるものなので、そこには面接者の個人的な感情反応も映し出されているのです。

アルゲランダーは、自我には「シーニックな機能 (scenic function)」があるとしています。すなわち、無意識的に内的葛藤を外界の対象を用いて実演 (enact) しようとする機能です。彼は、分析状況の今ここの患者のエナクトメント (enactment) と、転移と逆転移によって活性化されたシーニックな配置に焦点を当てることによって、そのシーンに生起した無意識の葛藤を直接的かつ簡潔に発見しやすくなるということ を、初回面接を活用して実証しよう としました。このシーニック・アンダースタンディン

グというアプローチを用いることで、分析家は出会いの相互的過程の中で実現化された患者の葛藤に参与することができるのです。分析家は、シーンにみずから入り込むことによって、患者から分析家へ無意識的に託された役割を進んで受け入れるのです。したがって、分析家のすべきことは、無意識的に現実化される隠れた葛藤についての「シーニックな情報」の理解を活用し、理解し、描写することです。分析家は、生起するシーンを、意識されず抑圧され、そのシーンの中に現実化された患者の早期幼児期の主要な状況の再演（re-enactment）として理解します。ある意味、私たちが語っているのは、神経症の症状形成のように、抑圧と現実化の妥協なのかもしれません。この再演は、患者と分析家の相互による創造物として認識しなければなりません。以上が、アルゲランダーが「シーニックな証拠」として記述したものです。

2. 臨床例

理論的な紹介を終えたところで、臨床実践の中のある初回面接の例から、シーニック・アンダースタンディングの概念と、患者の内的世界と葛藤についての理解を得るために、分析家がこの概念をどのように用いることができるのかについての事例を示したいと思います（Anne Laimböck による例）。これにより、患者の無意識的なコンプレックスによって浮かび上がるシーンが、どのように形作られるかを説明することができますでしょう。初回面接は、二人の主人公が初めて出会う場で、両者の関係によって良くも悪くも影響を受けていないため、シーンを呈示するのに特に適しているようです。

電話口には苦痛な声の 1 人の女性がいる。彼女はいくつか問題を抱えていて、かかりつけ医が私を紹介したのだと言う。彼女の話し方にはどこかしら、彼女の問題について私がいつもするように質問していくのを妨げる何かがある。彼女の問題をよく知らないまま、普通ではない始まり方になってしまう。待合室で私は、苦しんでいるが感情を抑えた 50 歳くらいの、非難の表情をした女性に出会う。彼女の片足には包帯が巻かれ、おそらく足を引きずって歩いている。3 階にある私のオフィスへの階段を上るのは、この患者にとっては非常に辛いだろうとすぐにわかる。エレベーターはあるのだが、動かすには特別な鍵が必要なのだ。もし彼女の困難を知っていたら、私は彼女をエレベーターで迎えて、彼女は階段を上がる大変さを避けることができていたはずだが。

彼女の非難の表情は、私に罪悪感と同時にある種の反感も抱かせる。私は罪悪感から、自分が驚いたこと、歩くことが困難だと知っていたらエレベーターで出迎えていただろうと伝える。彼女は直ちに反論して、そんなことは必要ないし、大丈夫だと言い、それから杖を使って、不自由ながらも自分の足で歩いて、面接室に入り腰掛ける。今私は彼女の向かいに座っている、明らかに助けを必要としていないこの女性をどうやって助けることができるのかに思いを巡らせている。彼女はとても傷ついているが、自分だけでなんとかしたいと思っている。

この初回面接を評価すると、この患者が、母親との間での中核的な無意識のエディプス葛藤を示していることが指摘できます。彼女の母親が、情緒的に十分に良いやり方で、彼女を気遣わなかったことで、彼女は深く傷ついているようでした。そうしてくれていれば、（やってくる）物事は彼女にとって、もっ

とずっと楽なはずでした。今彼女は松葉杖を使わなくてはならなかったし、困難な階段の昇降を手助けなしに、自力でやらなければなりませんでした。そしてまたエレベーターには、直接的に楽に上がってくる方法を身につける可能性として、新しい意味があったはずでした。上司の妻になるだけで全てはうまくいくのだと、初回面接で彼女は語りました。しかしこのやり方もまた、彼女にとっては使えなくなっているようで、そのことが彼女を非難がましく、憤慨させ、そして彼女は私からの援助の可能性を拒否しているのです。分析家の感じている罪悪感、彼女の母親の感情を映し出していたのです。必要なものが備わっていないという患者の感情を支えたり、この空想上の障害をうまく扱う手助けしたりするかわりに、分析家は深い無力感を感じているのです。

今私が描写したエピソードにおいて明らかになるのは、出会いの中で展開されていくシーンの中で、治療のセッティングの外的な環境と一人の人物としての分析家とが、無意識的葛藤を上演するためにどのように患者によって利用されるのか、ということです。

シーニック・アンダースタンディングを説明するもう一つの例は、まさに最近私の実践の中で起こったものです。私がこの例を提示するのは、私が患者ともつれることが、どのように患者の生育歴の重要な何かを理解するのに役立つのか、ということをはっきりと明らかにすると思われるからです。

寝椅子での2回目のセッションにやってくる30代前半の若い女性を、私は待っている。約束の時間にベルが鳴り、私は1階のドアを開けるボタンを押す。数秒後、二人の人間が階段で激しくいらだっている声が聞こえ、すぐに私はごくまれにしか起こらない間違いをしてしまったことに気づく。私は同時に二人の患者の約束を取り付けていたのだ！ 今や私は、どちらかを選ばなくてはならず、二人のうち一人を裏切らなければならない。私の反応はおそらく半分しか意識化されていないが、私は男性との面接を行うことにする。というのも彼はかなり長い期間の休みを挟んで面接に来ていて、緊急の問題を抱えて死にもの狂いで私に会いに来ているように見えるからだ。彼は不規則に来談するために、私は彼が今日来ることを忘れてしまっており、そして、もう一人の患者の寝椅子でのセッションは最近始まったばかりだった。おそらく彼女との精神分析的な治療を始めたいという私の願望のために、私は選んだ時間が本当に空いているのかどうかを注意深くチェックすることなく、セッションの時間を探していたのだ。

さて私は二人の患者、若い女性と年配の男性に向き合っていて、男性の方に中に入るようお願いをし、女性には私が間違いを犯してしまったことを謝り、次の日に面接の予約を入れることを提案する。驚いたことに彼女は非常に理解をもって反応し、私の提案を受け入れる。そして、彼女が去る時、私は自然とこう感じていた、彼女はそれに耐えられるだろうと。

次の日彼女はやってきて、寝椅子のいつもの場所についた後、長く沈黙する。私は彼女の非難するような態度をはっきりと感じ取ることができ、空気はどんどん緊張で満ちてくる。そこで私は、昨日起きたことについて彼女は言及しているのだと切り出す。彼女が話し始めると、彼女は私が彼女を追い出した時の感情を思い出し、彼女の声は非難するような調子になっていく。私が明らかに男性をひいきしたこと、そして、彼とともに階段を上る時彼女は既に結末をうっすらと予想していたことについて、ひどく失望したと彼女は語る。そして彼女は次のように付け加える。「そしてもちろんあなたは私を追い出し

ましたけど、こんなことはいつも起こっていることです。なぜなら皆、私がそれに耐えられると思うからです！」と。

これはまさしく患者と分析家の間の実際の「シーン」における葛藤の上演です。それは、同じ時間に二つの予約を入れてしまったという、私の失錯行為（Freudian slip）によってもたらされたものです。これがマネジメントを誤ったことによる私の失敗であることは明らかですが、それと同時に、実りある過程を進めるのにとっても有益であることが分かりました。なぜなら、患者の問題が現実化し、情緒を伴ってそこに現れたからです。彼女は自分が本当に重要であると感じたことが一度もなく、ずっと耐えてきたために、幼少期から感じてきた脇に置かれる感覚について、今やっと、話すことが可能になったのです。このことが引き起こしてきた計り知れない怒りは、常に抑圧されて来なければなりませんでした。なぜなら、もしはっきりと主張したら、自分は拒絶されるだろうと彼女は恐れていたからでした。このため実際に、人々は彼女をタフで強い人で、そしてそれゆえにそれに耐えられるとみなしてしまっており、こうしたことはきわめてよくある結末だったのです。

3. 理論的考察—患者が演出するドラマの相互作用としてのシーン

シーニック・アンダースタンディングは転移と逆転移の重要性をさらに発展させたものとして概念化されました。これらのプロセスに関連した精神分析的洞察は非常に大きな可能性を持つものとなります。ここで、ポーラ・ハイマン（Heimann, P., 1950）の業績について言及しなければなりません。彼女は、逆転移が患者の内的世界をより深く理解する源泉として極めて重要であることを、強調しました。患者の内的世界は逆転移を経由して分析家の感情反応の中で実現します。ハイマンの仕事は、患者と分析家に無意識のレベルで何が起きているのかを分析家がよりよく理解することを可能にするもので、これはその後の非常に実り豊かな発展の端緒として考えられるでしょう。ハイマンが、逆転移を患者の葛藤を理解する方法として認識することが重要だと見いだしたことは、アルゲランダーがシーニック・アンダースタンディングについて述べたことと、直接つながっていると考えられます。無意識の素材を意識的なシーンに関連付け、内的なシーンに従って外的なシーンを形作る能力は、アルゲランダーにおいては、自我のシーニックな機能と表現されました。ロルフ・クリューヴァー（Rolf Klüwer）、彼はジクムント・フロイト研究所出身で、ドイツでフォーカルセラピー（Focal therapy：葛藤焦点型の短期精神分析）を発展させたことで知られる分析家ですが、「ハイマンの逆転移の理解とシーニック・アンダースタンディングとはまっすぐにつながっている」（1995）と結論付けています。こうして、私たちは転移と逆転移の過程で起こっている複雑さを、患者と分析家の間の双方向的なやりとりにおけるシーニック・アンダースタンディングで強調される事象の基礎として考えることができます。この二人の主人公の間の相互作用の中で、私たちが気づかねばならないのは、言語及び非言語の情報や表現のスペクトラム全体がシーンの相互作用に入ってきており、だからこそ、分析家はそれに気がつい理解することができるということです。

もし逆転移に関連したことをより深い理解に至るための経路として真剣に考えるならば、分析家は自分の目の前で生じているかもしれない患者の創造に対して開かれるようになります。患者と分析家の相

相互作用の中で展開しているシーンは、幼児期の特定の体験の顕在化というだけでなく、むしろ多くのひとつひとつのシーンから顕われてくるその人の幼児期のあり方なのです。それはゲシュタルト現象の法則によって方向づけられた自我のシーニックな機能により、現時点において創造されるものなのです。シーンが実際に意味しているものは、分析のパートナーの両者に結びついており、その間主観的な文脈から切り離して見ることはできません。その意味で、それは二人のあいだの間主観的領域で創造された力動的な構造であると把握されなくてはなりません。それは新しい偽りのない何かであって、単に患者の過去からやってきたものではないのです。

ここで分析実践からもう一つ例を挙げて、自我のシーニックな機能が無意識のトピックを上演するためのセッティングをどのように使うか、ということ为例証する手助けとしたいと思います（ロルフ・クリューヴァーが引用しているジョセフ・サンドラーによる例です。）。

若い男性との心理療法の初期段階のあいだ中、私は、自分が普段よりも多くしゃべってしまうことに気が付いていた。このことを認識するにつれ、私はこの治療は中断してしまうかもしれないと恐れていることに気づいた。いつもよりも多く話すというこの行動は、患者を引き止めようとし、彼の恐れを減らそうと意図しているのだった。そして同時に、それは私ができることができた患者に潜在する攻撃的傾向を回避することを意味していたのだ。これらの自己分析的な内省を行ったことで、私はその患者に対しても普段の振る舞いに戻ることができた。同時に私は、それでもやはりたくさん話したくなる誘惑に駆られていることを感じとっていた。しばらくして、私はそれが患者の話し方と関係があることに気づいた。彼がわずかに声のトーンを変えると、それぞれの言葉が質問のように聞こえるような効果があった。患者も私も、これまでそれに気づいていなかった。私はその現象に彼の注意を向けさせた。そして私は、どれほど彼が私の声の音によって落ち着きなだめられる必要があるのかということを示した。その時、彼のこころの中に浮かんだのは、次のようなことだった。短気な父親に叩かれることを恐れて、どれほど必死になって父親を会話に巻き込もうとしていたか、そしてそうすることで、父親は自分に怒っていない、自分は身体的な暴力に脅されていないと、どれほど自分に言いかけようとしてきたか。その後の過程では、患者が父親びいきの子どもになろうとして父親の愛情と好意を求めていたということ、そして同時に、自分自身が父親に投影していた攻撃的な感情を恐れていたことが明らかになった。

この例を再び見てみると、私たちは、分析家の逆転移によって引き起こされた個人的な反応が、無意識の状況をより深く理解するのにどのように役に立つのかが分かります。それはシーンの中で患者が表現しようとして持ち込んだもので、後に理解され言語化されています。私たちが感知するメッセージをこのような形で理解し言語化する可能性は、日常的な仲間との人間的な接触とはかなり対照的です。というのも日常では、こういった無意識のシナリオは、葛藤を避けるためにむしろ脇に追いやられるからです。しかし精神分析的な状況では、これらは非常に大きな利益を持っています。分析家は顕われつつあるシーンが表面に出てくることを助けようとします。そして、患者がシーンを演じるためのステージを提供し、その中で分析家が役を演じるのです。そのシーンを見ることができるようするために、私たちは個人的な視点や意見を脇に置き、患者が彼の演技によって私たちに伝えようとするものに耳を傾

けられるように、ジクムント・フロイトが「平等に漂う注意」と呼んだ態度を取るのです。

4. 結論

私が既に述べてきましたようにシーニック・アンダースタンディングは、患者が分析家との意識的關係とは別のところで演じている潜在的ドラマに関係するものであり、患者は自分の物語のステージの中で、分析家が積極的役割を担うように誘うのです。患者がシーンの中に持ち込んでくる潜在的ドラマは、一見すると意味のないもののよう、分析家には知覚されます。つまりそれは、論理的思考を辿るような通常のやり方では理解できないのです。それは謎として現れます。シーンを謎として把握することで、分析家はシーンの潜在的な内容に注意を向けることができ、無意識のレベルで知覚の表面に現れてくる、早期の対象関係に起源をもつ隠されたメッセージへと感覚を開くことができるのです。シーンの中で患者の無意識は、より早期の対象関係のレベルまでに退行しています。その対象関係とは、患者の心的構造の一部になったもので、患者が分析家に対して持ち込んでいるシーンの開始点となるものです。これも、分析家がメッセージに耳を傾けるのに十分なほど開かれていればの話ですが。

私にとって興味深く思われるのは、フランクフルトでアルゲランダーとローレンツァーにより、同じ 1960 年代にそれぞれ独立に発展したシーニック・アンダースタンディングの概念が、ドイツの精神分析ではとても影響力をもったのに対し、英国やアメリカに起源をもつ理論の方が優勢であるような他の国々では、それほど影響力を持たなかったという点です。私見では、ここには明らかに、ナチス体制により、1930 年から 40 年代に精神分析家（多くがユダヤ人でした）が大量に英国とアメリカに移住せざるをえなかったという背景に根をもつ歴史的な理由があります。この頭脳の流出はドイツの精神分析に計り知れない貧困化をもたらしました。そして、残った精神分析家は多かれ少なかれ、隠れて仕事をしなければならませんでした。第二次世界大戦後、何年もの空白があり、60 年代初頭になってやっと、海外に流出していた分析家が帰ってきたり、海外から精神分析家を招聘しりする、ある種の逆輸入が起きました。当時、精神分析はメラニー・クラインとその後継者たちの考えに強い影響を受けており、対象関係論がますます人気となっていました。これらの新しい発見は、精神分析の理論的概念の「関係性への転回」"relational turn" と呼ばれうるものにとって代わられました。これは、主に患者の無意識に専念する伝統的なフロイト派の方法の代わりに、患者と分析家の関係性をより強調するものです。その目的はもはや個人の無意識をできる限り意識させることではなく、むしろ患者が分析関係の中で新たな治療的体験をすることを助けることになりました。この非常に有益な発展により、精神分析家の患者との会い方はたいへん豊かなものになり、この文脈でようやく、シーニック・アンダースタンディングの概念は、間主観的なプロセスとそれに関わる主人公たちの創造的な行ないを扱う様々な理論の中に居場所を見つけたのです。

文 献

- Argelander, H.: (1966): Die Psychodynamik des Erstinterviews. *Psyche Z Psychoanalyse* 20, 40-53
Argelander, H.: (1970): *Das Erstinterview in der Psychotherapie* (Wissenschaftl. Buchgesellschaft Darmstadt)
Heimann, P.: (1950): On counter-transference. *Int. J. Psychoanal.* 31, 81-84

Klüwer, R.: (1995): Agieren und Mitagieren – 10 Jahre später. *Z. Psychoanal. Theorie Praxis* X, 45-71

Klüwer, R.: (2000): Das szenische Verstehen und psychoanalytische Prozesse. In Drews, S. (Hrsg.): *Zum „Szenischen Verstehen“ in der Psychoanalyse*. Frankfurt/Main (Brandes&Apsel), 21-42

Laimböck, A.: (2013): Psychic Reality, the Scene and the Emergence of Interpretation: szenisches Verstehen. IPA Congress, Prague.

※解題

本テキストは、2014年4月8日に開催された、クラウス・コッヒャー（Klaus Kocher）氏による講演“Scenic Understanding” – a Psychoanalytic Concept to Approach the Unconscious を翻訳したものである。この講演は、京都大学教育学研究科心理臨床領域「三好暁光記念心理臨床基金」から助成を受けておこなわれた。

Scenic Understanding（ドイツ語では *szenisches Verstehen*）という概念は、ドイツの精神分析ではきわめて重要な概念であり、とりわけ初回面接において、そして面接が危機的な状況にあるときに重要とされる概念である。ドイツ精神分析そのものが、日本ではほとんど知られていないため、この重要な概念も日本では紹介されることは、これまでなかった。しかしながら、臨床的にきわめて豊かで示唆に富む考えであり、セラピストとクライアントとのあいだに何が無意識的に布置され、それをどのように扱っていくかということに関して、重要なヒントを与えてくれる。

szenisches Verstehen は、日本語に訳すならば、情景的理解もしくは光景的理解ということになるが、映画のシーンのように何かを演じさせられている、というニュアンスがそれではうまく伝わらないので、今回の邦訳では、そのまま「シーニック・アンダースタンディング」とした。本講演の中での、説明から、この概念がどのような意味の言葉であるのかを感じ取っていただきたい。

ドイツ精神分析は、第二次世界大戦時にはナチ体制下で弾圧され、主要な分析家たちはアメリカや英国へと亡命した。ドイツに残った者たちは、生き残りをかけた苦肉の策として、精神分析が実は第三帝国の繁栄に役立つものだとして主張したりもした。このような事情から、ドイツ精神分析は、IPA 主導の他国の精神分析とのあいだで、戦後も禍根を残すこととなった。また、国家的弾圧への反省から、週3回までの分析は国民健康保険の適用となり、いちはやく精神分析家の国家資格化もなされたりもした。こうした国家的な優遇は、逆説的に、週3回分析も精神分析とみなすという IPA の主張とは異なる定義を生み出したり、対費用効果の効率性から週1回の分析も多くおこなわれたり、寝椅子ではなく対面法も多く取り入れられたりなど、精神分析技法の多様化と、独自のトレーニングシステムを生み出した。このことで、国際的に主流とされる正統派の精神分析の潮流からは、隔絶される傾向があった。

ナチの弾圧により優秀な分析家たちを多数流出させてしまったドイツ精神分析界が立ち直るのは、困難な過程であった。戦後に英国対象関係論が華々しく世界中に広まったことと対照的であった。しかしながらその中でも、本講演中でも言及のあったアレクサンダー・ミッチェルリッヒやロルフ・クリューバーらの尽力によって、息を吹き返してきた。マイケル・バリント（Michael Balint）の功績も大きい。そうした一連の流れの中で、ゲシュタルト心理学の影響を取り入れながら発展したのが、*szenisches Verstehen* の考えである。そこには、間主観性を重要な概念とする哲学における現象学の潮流の影響もあるであろう。

現在、英国・米国の精神分析の発展の中で出てきた **enactment** の発想と **szenisches Verstehen** が極めて近い考え方であることに、読者は気付かれたことであろう。今まで隔絶されていたふたつの精神分析界に理論的なつながりが出てきたことで、どのように発展していくのか、今後が楽しみである。なお、クライン派からみた **szenisches Verstehen** に関しては、フランクフルトのジクムント・フロイト研究所のトマス・プレンカー (Tomas Plänkers) 氏による論考が、『臨床心理事例研究 (京都大学大学院教育学研究科心理教育相談室紀要)』第 40 号 (2013 年) に掲載されている。アクセス可能な方は、併せてこちらも参照すると、この概念のもつ豊かな意味がさらに理解できることであろう。

なお、本講演には臨床事例が含まれているが、Web 公開にあたっては、コッヒャー氏からの快諾を得ている。一般に公開されることに対して十分に配慮がなされ記述された事例であることを申し添えておく。

(大山泰宏)